

ZOCALO 2025 7 ▶ 9

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

就任インタビュー

関直子 特任館長が語る 美術館のこれから



今年度より、早稲田大学文学学術院教授の関直子氏が特任館長に就任いたしました。関特任館長に、ご自身のこと、そして美術館のこれからについてお話しいただきます。

この春より、特任館長に就任いたしました。東京都美術館を経て、1993年から2020年まで東京都現代美術館に勤めておりました。建畠哲前館長には、東京都現代美術館の準備室でお世話になって以来、ご縁があります。今回後任となったことで、これまでいろいろな場面で建畠氏に教えていただいたことなど、改めて思いを致しています。

学生時代、1930年代後半から50年代後半の美術に関心を寄せていました。研究対象は、アンリ・マティスによる「ヴァンスのロザリオ礼拝堂」です。近代以降、大都市の美術館が作品を収集し、美術史を形作っていく動きとは対照的に、マティスは南仏という首都から遠く離れた場所で、礼拝堂建築と装飾にたずさわりました。マティスやモダニズムの作家は、美術館についてどう考えていたのか。現在も思いをめぐらせているテーマです。

いざ自分が美術館側の立場となった当初、東京都現代美術館(以下、都現美)が「現代」美術館として、開館時に1945年の戦後から美術史を語ることに少々違和感をおぼえました。戦前と戦後、近代と現代の断絶をいかにつなげるかをテーマに、「水辺のモダン 江東・墨田の美術」(2001年)や「東京府美術館の時代 1926～1970」(2005年)などの展覧会に関わりました。都現美のリニューアル後には、「百年の編み手たち 一流動する日本の近現代美術」展(2019年)で、都現美のコレクションで語る近現代日本美術の始まりを1914年に設定し、現在までの流れを再考しました。そのほか、印象深い展覧会は多数あります。「桂ゆき 一ある寓話」(2013年)は、彼女の活動を包括的に考察する貴重な機会となりました。戦前と戦後をつなぐ重要な前衛作家として、今も調査を続けています。桂のように、社会との接続を求め、ジャンルを横断して活動した女性作家の活動に着目し、同時代での位置づけを試みることは、これまで可視化されてこなかった様々な事象を掘り上げる契機と

なります。埼玉県立近代美術館でも、今後どのような作家を取り上げるのか、重要なことだと思っています。

埼玉県立近代美術館の展示は、90年代以降よく見てきました。「1970年 一物質と知覚」(1995年)、「日本の70年代展」(2012年)、「DECODE／出来事と記録」(2019年)、近年では「吉田克朗展」(2024年)など深く記憶に残っています。「小村雪岱とその時代」(2009年)の、舞台装置や美しい装幀本も印象的です。「長澤英俊展 一オーロラの向かう所」(2009年)、「生誕100年記念 瑛九展」(2011年)など、県内の異なる運営体制の市立・私立の美術館と協働した展覧会は、大変な努力のもと実現したのだと思います。様々な美術館と恒常的なネットワークを持ち、良い関係をつくってきていることは、この美術館の特色のひとつでしょう。

コレクションについては、バランスが取れているという印象を抱いています。何より、西洋のモダンアートの良作を収集していることはこの館の強みだと思います。20世紀・21世紀について考える時、19世紀後半の色々な試みを示す作品を参照点に出来ることは、館の活動の幅を広げます。その好例に、印象派と日本近代洋画を取り上げた「田園讃歌 一近代絵画に見る自然と人間」(2007年)があります。

印象派以降の作家が郊外へ出掛け、住むようになる動きは、埼玉にも見られます。明治期・震災後・戦後に埼玉に移り住んだ作家と、彼らのネットワークに対してまなざしを向けることは、美術館にとって大切な意味を持つてくると思っています。昔も今も、都心に住んで制作する作家はそれほど多くはありません。また、東京、特に隅田川の東側は、関東大震災と東京大空襲によってほぼ灰燼に帰した土地です。都現美時代、資料調査において苦労した思い出があります。対して、埼玉には歴史的な蓄積があります。今後も、未だ充分に着目されていない埼玉の作家や作品を発掘できるでしょうし、やれることはまだまだ数多くあると感じています。

企画展「メキシコへのまなざし」(2025年)のように、コレクションが核になる展覧会について、ぜひ今後は、そこに若い世代の作家による新作を1点でも入れ、現在の視点を加えていくと良いと思います。これは、企画展に限らずコレクション展においても同様です。MOMASコレクションも、近隣在住の作家と関わることで、視点が随分変わってくるのでは、と思います。またMOMASコレクションでは、企画展との関わりを意識した展示も見られますが、テーマで内容を関連付けるだけでなく、違う方向性を向いても良いのではないかと思います。例えば「実は同時代、企画展で取り上げた動きとは全く違う動向もあった」という提示もありえるでしょう。

作品との出会いでは感動だけではなく、鑑賞者が元々持っているものが展示を通して、新たなものの見方や気づき

を得ること、いわば、自分自身の中の文脈が更新されていくことがあります。美術館として、この文脈を大切にしていきたいのです。そのためには、作品を並べ、空間を提示することで鑑賞者を説得させること、そしてそこに言葉を与えること。この2つが学芸員の重要な仕事です。企画展とコレクション展の両方によって、鑑賞者が能動的に新たな出会いとの回路を作っていくような機会を提供できる場でありたい。「綺麗だった、愉しかった」と、美術館の外に出ればやがて忘れてしまうような経験ではなく、展覧会を見た人が、「こんな考え方があるのか」、「また美術館に行ってみよう」と、自らを積極的に更新できる場を提供することが、美術館の理想的な役割であり、魅力になると思うのです。

2020年代は、解決の難しい課題やメディア環境の変化など、複雑さを増す世界と新たな関係性を模索する時代です。埼玉県立近代美術館は、43年間の蓄積を活かしながら、人々の「今」の気持ちに寄り添って美術館の可能性を探っていくことが大切ではないでしょうか。現在の勤務先である早稲田大学では、日々若い世代の価値観に刺激を受けています。新しい環境で育ってきた若い世代が求めるものは、これまでと変わらないものもあれば、違うものもあります。彼らが何を求めて、どこに目を向けているか、私自身学芸員とともに常に考えていかなければならないと思っています。

まだ着任したばかりですので、これから何が出来るか、手探りの状態です。展覧会やコレクション収集はもちろんのこと、ウェブページでの見せ方、アーカイブの取り扱いについてなど、色々考えていきたいことがあります。ぜひ皆様には、これからの当館の活動にもご期待いただければと思っています。(聞き手:K.M.)



Nerhol

Nerhol(ネルホル)は田中義久(1980-)と飯田竜太(1981-)のふたりが2007年に結成したアーティストデュオです。写真集などのブックデザインやアートディレクション、文化施設のVI計画などを幅広く手掛けるグラフィックデザイナーの田中と、本や文字を素材とする紙の彫刻を制作してきた彫刻家の飯田。異なる分野で活動するふたりの対話を起点とする作品は、国内外で高く評価されています。

初期の活動を代表するポートレートのシリーズ「被写体を連続撮影した数百枚の写真を積み重ねて彫り刻む」において、写真と彫刻の境界をしなやかに往還する独自の表現が注目を集めて以降、Nerholはさまざまな対象へのリサーチと幅広い素材へのアプローチによってその制作手法を飛躍的に展開し、時間や空間の隔たりを超えた因果関係の複雑な絡み合いや、不可視の物語をも語りうる豊かな表現へと深化させてきました。

昨年Nerholは、結成以来17年間の活動の全貌を振り返る大規模個展「Nerhol 水平線を捲る」(千葉市美術館)を開催しました。それに続く本展は、Nerholの活動に通底する「移動」というテーマをゆるやかに共有しつつ、内容の異なる連続個展として構想されたものです。初期作品から最新

作までを網羅的に見せた千葉市美術館での成果をふまえて、いまふたりが取り組むべきと考えるテーマや、この先の展望を見せる新作展が埼玉での展覧会の位置づけでした。

昨年の展示を振り返って、Nerholは自分たちの関心の推移や手法の進化／深化を説得的に示すことができたという手ごたえを感じる一方で、複雑かつ多義的な世界のありようをいまだ掘り起こせてはいない、という感覚が一層強まったと語ります。しかしそれは、必ずしも目的の未達を意味するのではなく、自分たちの制作を足元から見つめなおす強い動機になったはずです。

Nerholの制作行為は、素材となる写真や動画から切り出した画像の、高解像度で明瞭な状態を、積層して彫ることでキャンセルしていくものということができます。事前に綿密なデッサンを行いはしても、彫ることでどのようなイメージが立ち現れるのか、正確に予測することは難しいといえます。一見して「わかる」イメージが崩壊していき、かわって半ば偶然に立ち上がる別の何か。そこに作家自身が異なる時間・空間をつなぎ切り開く表現の可能性を見出しており、鑑賞者の意識の変容もまた賭かれています。

もとより、アーティストデュオというNerholの活動形態もまた、不随意性や偶然性を織り込んだありかたです。制作行為を一人で手掛けることの一貫性や制御可能性ではなく、ふたりの差異も一致も対話を通じてたえず擦り合わせ、制作を駆動する力と変えてゆく、ときに隔靴搔痒の局面すらあるだろうそのプロセスが、作品に奥行きと深みを生み出してきたはずです。

本展に先行して今年2月に開催されたYutaka Kikutake Galleryでの個展では、3時間の映画から15,000枚の静止画を切り出し、出力した紙を1m超の高さに積み上げた作品を発表しました。映画の場面の移り変わりが紙の側面のノイズのような色の集積に変貌する、至極単純な帰結のようにも思えますが、実際にこの形に置き換えなければ目にすることができない光景でもあります。日常を懐疑的にとらえ、物理的な実感を持つてメディアに置き換えて試してみることで、それがNerholにとっての制作行為の基軸であり、表層的に「わかる」ことから多層的で複雑な世界へと近づく術なのだといえるでしょう。

同展のクロージング・トークでNerholのふたりと対談した画家・杉戸洋氏は、どの作品も「彫る」というよりも「分解している」、つまりは有機物が土に還っていく姿に見え、そのプロセスと時間を考えさせる作品に思える、と指摘しています。

企画展「Nerhol」 2025年7月12日(土)～10月13日(月・祝)

作品をとおして何らかの新たな「確からしさ」を提示するのではなく、物事を異なる次元からとらえるしなやかな意識の変容を促そうとするNerholの制作は、「豊穣な土をつくる」ことに近いのかもしれない。

本展に向けて、Nerholはまた新たなアプローチに取り組んでいます。本項執筆時にまだその全貌は見えていませんが、彼らの探究の成果がわたしたちの日常への眼差しを確かに変えてくれるはずです。(O.I.)



Nerhol (Cirsium vulgare) 2024年 ©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery



Nerhol (Canvas (Oasa)) 2025年 ©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery



Nerhol (Untitled) 2025年 ©Nerhol Courtesy of Yutaka Kikutake Gallery